

---

# 妖師-アヤカシ-

闇木諒諧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖師 - アヤカシ -

### 【Nコード】

N5096I

### 【作者名】

闇木諒諧

### 【あらすじ】

夏休み前、国立名門西ノ山中学校に通う切裂時男に超美人転校生秋永千鶴が接触してくる。彼女は時男にあるゲームを、無理矢理参加させようとするが・・・

1巻 妖師・アヤカシ - (前書き)

15のガキなりにがんばってみました。

## 1巻 妖師・アヤカシ・

ここは東京都新宿区、今ここで二人の妖師・アヤカシ・が戦いに終止符を打とうとしていた。

「そんな・・・、こんな強いなんて。」

「諦めるよ、玉出しなよ。」

一方の妖師・アヤカシ・がもう一方にとどめを刺そうとした。が、  
「悪いけど玉はあんたなんかには渡さないから!!」

死にかけていたもう一方が突然姿を消した。急に消えたので、一方の妖師・アヤカシ・は一瞬戸惑ったがすぐに冷静になった。

「ふふ、そんなことしたってすぐバレるよ。」

ここは新宿区西ノ山中学校、世間からは名門とされているすごい中学校だ。オレの名前は切裂時男、キリサキトキオこの西中の1年生だ。しかし今日はやけに騒がしい。

「おいおい聞いたか、ここに本物の天才が来るらしいぜ。」

「本物ってどーゆうことだよ？まあ、ここは天才が全国から集まってるみたいなのがあるが。」

近くの男子がぶつぶつ話していたが、確かにそうだ。西中は天才の集まりだ、ここに本物が来るということは・・・。そんなことを考えながら教室に入った。

「今日は皆に新しい仲間を紹介すんで、入ってえな。」

この関西弁まるだしの女教師は赤井香苗、アカイカナエその声と呼ばれて、一人の女子が入ってきた。その容姿を見た瞬間、オレを含む男子全員釘付けになった。

「この度、この学校に転校してきた秋永千鶴アキナガチヅルです。よろしくお願ひします。」

「うへへへ。」

秋永のルックスは完璧だ！年齢13にしてあのバスト、天使のような顔。あんな子他にいるものかああ！

「ほんじゃあ、切裂の隣な。切裂イ、いろいろ教えたれえ。」

「いいいいいいいっいやったあたたたたたああ！！こんなにも心で叫んだことはない！だがこの喜びは、一瞬にして恐怖へと変わった・・。クラスの男子全員の殺意満々の眼差しがオレを襲う。」

「まっずいぞおお、オレの計画がペアにいい。」

「どうかした？」

「なんでもないよ。」

とりあえず、皆がいない場所でデキていくしかないな。

放課後、オレは秋永に呼び出された。まさか！告られるのか！？

「ねえ、君って陰陽師？いや、そんな類たぐいの人？」

「は？」

秋永が訳のわからないことを聞いてきた。オレが陰陽師かその類の人間か？どっちでもねえよ。

「どっちでもねえよ、ただオレの家は古寺だけだな。」

「なんて名前？」

更にしつこく聞いてくる。こんなこと聞いて、どーすんだ？

「実座里寺みざしじってんだが。って、なんで聞くんだよ。」

「君、親に何も聞かされてないの？実座理寺って日本最高峰の妖術使いの総本山じゃない！！」

なんで秋永がそんなこと知ってたんだ、当のオレが知らないのに。確かに昔から人が多かったが、あれが全員妖術使いなんて。秋永は、ポケットから水色の玉を出した。

「君ならこれと、冥玉めいぎよくとシンク口できると思う。」

「まさかとは思うが、この玉をようは飲めと？」

うんと縦にふった。冗談じゃないぞ、こんな拳ぐらいのでかい玉を！でも秋永は焦っていた。

「早くっ！！」

その瞬間、窓が割れ一人の男が入ってきた。

「ふっ、とらえたぞ。」

そう言った瞬間男は、口から炎を吐き出した。その炎は、オレと秋

永を包み込んでしまった。

「うわあ、熱っ！！なんだこれ!?」

「ヤツはこのゲームの参加者、妖師・アヤカシ・よ!」

妖師・アヤカシ。そういえば昔母さんにそいつと戦ったために、ひとつ妖術を覚えてもらったっけ。しかしこの熱さは異常だろ……。

「それ貸せ!んぐお……!!」

オレはヤケになって玉を飲んだ。すると、全身が青く光りだした。

「成功よ!玉とシンクロできたんだわ!!」

そっか、できたのか。でも使い方がわからない。とりあえず!

「水虎すいこ!!」

「うおわああ!!」

オレが唱えたのは水虎という妖術だ。空気中の水分を凝縮させて、敵に放つ。妖術のなかじゃ格下の方だ。だが男は、すぐに立ち上がった。

「なんだなんだ、新たなプレイヤーかい?そんじゃその子とまとめて消してあげる。」

男は腰の銃を、オレたちに向けた。コイツ、オレたちを殺すつもりだ……!

「逝っちゃいな。」

銃声が校内に響く。

「ふふ〜ん、死んだだろ……。……!?!」

なんと!オレは生きている!!ピンピンしている、秋永はだいぶバテているけど……。

「追風成功おいかぜ!!」

「くうううっ!無理矢理術を使わせたなあ!?!」

そっいえば、喰らう直前に後ろからいきなり押されて……。秋永がやったのか。

「ようし!とどめといこーか。」

「うっ……。」

水虎でメタクタにした。これでひとまず終わった。

「終わったな、でも今何時？」

「8時過ぎ……。」

オレは家に戻った。当然のごとく怒られた。

1巻 妖師・アヤカシ - (後書き)

次回、秋永が参加していたゲームの全貌が明らかに！

2巻 KIDDO(前書き)

前回、見事敵を倒した時男だが・・・

## 2巻 K I D O

翌日、秋永から男は死んだと報告された。オレは正直戸惑った。人を殺したんだし、あんなに妖術を使ってしまったから。

「大丈夫、君のやったことは絶対警察にはバレない。」

「どーゆうことだ？」

妖術に使う水には、僅かながら鉄分が含まれている。それで周辺の人間が調べられ、アリバイのないオレ<sup>キドウ</sup>犯人に容易に結びつく。

「それはね、このゲームK I D Oの主催者さんが参加者の犯した犯罪を、参加中はすべてチャラにしてくれてるからなの。」

「このゲーム中に起きた犯罪がなかったことになるってのか？」

となると、前の男のような連中がほとんどだろう。犯罪をチャラにできるってことは、人間を何人殺しても構わないということだ……。物騒にも程がある。

「そもそも、いつからこのゲームは始まってんだ!？」

「300年以上も前からよ。このゲームに関する資料で一番古いのが300年前のモノってだけで実際はもっと昔から行われてると思う。」

300年以上も前から日本人は、こんな物騒いや、凶悪な殺人ゲームをしていたのか!? 恐らく、戦時中も構わずやっていたんだろう。秋永はこのゲームに何食わぬ顔で参加している、異常の域に達している……。

「君にもこのK I D Oに参加してほしい。」

「は!?! ぶざけんな! あんなゲームに参加しろだあ!?!」

オレはハツとした、ここは食堂だ。皆がオレを見る。

「あつははは……。すみません。」

オレと秋永はしばらくダンマリだった。そして、秋永の方から話が出した。

「今日の放課後、主催者さんに逢わせるから。教室で誰もいなくな

るまで待つてて。」

「けっ、わかったよ。」

放課後になり、誰もいなくなった。すると、オレと秋永だけの教室に赤井が入ってきた。

「へえ、切裂も参加すんのか。」

「赤井！？・・・なんで？」

訳がわからない、なんでこの女がここに来る？・・・まさか！

「お察しの通りや、あたしがこのKIDの主催者や！」

やはり、この女が主催者だったのか。オレは驚きと怒りに満ちていた。

「主催者、赤井香苗！今すぐこのゲームを中止しろ！！これ以上人間を殺してなんになる！？」

赤井はオレの言葉に怯んだが、すぐに言い返す。

「それは駄目や、やめたら参加者の願いを聞いてやれやんのやから。」

「なんだと！？」

参加者の願いを聞いてやれない、ただそれだけの理由で続けてるってのか！？

「無論それだけやない、これは犯罪者を減らすことにもなつとるんや。」

「人間何人殺してもいいってルールでか、矛盾だな。」

オレは間違っではないない、このゲームは明らかにおかしい。しかしこの直後オレはとんでもない誤解をしていたことになる。

「人間を殺してもいいってんは言っとるけど、殺していいのは犯罪者に限るんやで。」

「そこにも矛盾があるが。」

赤井は溜め息をついた。言い負かせたんだろうか？

「ええか、人間っつーのは己が願いのためなら親だろうと犠牲にするモンや。参加者、秋永も何か一つ犠牲にして参加しとるんや。秋永の場合は、自分の寿命を半分にして参加しとる。秋永は自身の不

老不死を願ってKIDに参加しとるんや!」

秋永の願いってそんなスゴイもんだつたのか……。たしかに、人間はものごとを成し遂げるためには必ず犠牲を必要とする。オレはもしこのゲームに参加して何を願う?

「あんたのトコの事情は知ってる。昔本家の長男だったのに、才能がないってことでこんなトコまで追い出されたんやろ?」

そんなこと知ってる人間ってたら、叔父さんぐらいしかいねえぞ。秋永も驚いている。

「そんなことが……。でも十分な力はあるじゃない!」

「そっか、よし!オレも参加する!!そんで、本当に願いを叶えてくれんדרうな?」

オレは本家の当主になりたい!と叫んだ。秋永も笑顔でがんばれと言ってくれた。

「じゃ、何を犠牲にすんねん?」

「この本家の人間の証、青き石だ。」

そして、このゲームに正式に参加した。

2巻 KIDDO(後書き)

次回、いきなり最強の妖師 - アヤカシ - が現れる！

**3巻 最強の妖師・アヤカシ・は会長サマ(前書き)**

前回、正式にKIEDOに参加。

### 3巻 最強の妖師・アヤカシ・は会長サマ

オレは正式にこのKIDDOに参加した、青き石を犠牲にして。主催者の赤井、秋永も快く喜んでくれた。

「んじゃ、早速今夜から戦ってもらおかな！」

「なにい!？」

もうやるつてののか!? 正式に参加したが、いくらなんでも早すぎる。心の準備ができてないし、そしてどんな戦い方をすればいいのかよくわかっていない。

「そんじゃ切裂! 戦い方に関しては、秋永にみっちりしこんでもらえや。」

「じゃ、今夜まで時間ないけど、みっちり仕込んであげる。」

秋永はノリノリだ、こいつ見た目に反して結構Sな部分あるかも・・・。オレはしぶしぶ秋永の戦闘講習? にのつた。

「君つて、妖術これだけしか持ってないの? 妖気はバカでかいのに・・・。」

「悪かったな!」

ズカズカと文句を放ってくる。秋永は多分、転校前はこの文句をむちやくちや言う性格でモテナかったんだろーな。

「そろそろ時間ね・・・、気を引き締めなさい。」

「ああ、わかった。」

オレはあることが気になっていた。赤井が去り際に言った言葉、表情に妙な違和感があった。あれは何かある。3時間前、赤井は去り際に恐いことを言った。

「切裂、今夜へタしたら死ぬで・・・。」

あの言葉からして、今夜の戦いが荒れるのは間違いない! 秋永も表情が硬い、今夜はヤマ確定だ。

「来たな、この時間ときが。」

どこからか、渋い声が聞こえてくる。振り向くと、老人がいた。

「逝け、若造。」

「バチイイイツ!!」

「がああああああ!!」

全身に雷並み、それ以上と言える電撃が走った。まず大概のヤツはこれで終わるだろうが、オレはそんな弱い体じゃない。

「水虎!」

老人は、オレの体力に少し驚いてるようだが、すぐさまオレの攻撃をかわした。

「ほう、水妖術系とは。珍しいものじゃな。」

この老人、オレの妖術系を一発だけでアツサリ見破りやがった。相当の場数を踏んでるプロフェツションナルだろう。

「下がって、切裂くん!風妖術!嵐砲弾!」

秋永が左手に、風の塊を作っていた。しかし、スゲエ風だ。秋永の前方の壁なんか、ズタズタになっている。後ろに下がって良かった。

「喰らいなさい!」

「ビュオオオオオウウ!」

ものすごい音をたてて、嵐砲弾が老人に当たろうとしている。だが、老人は笑っている。

「ふふつ、火妖術。炎帝拳。」

老人が拳を握った瞬間、拳に炎が集まってきた。そして、その炎が嵐砲弾に撃たれた。そして風の力で、炎は大きくなってしまった。

「きやあああああつ!」

「うわあああつ!」

オレと秋永は衝撃で、近くの公園まで吹き飛んだ。なんて妖気だ、あれは完全に化け物だぜ……。

「そっちの女子は、風妖術系か。」

オレと秋永は動けない。衝撃のせいで、体が麻痺っている。これじゃ、あの老人に瞬殺される!

「炎妖術!紅蓮閃!!」

「なぬう！？」

ドツゴオオオオオオオオオオ！

紅い閃光が老人を襲った。誰だ、誰がやったんだ。すると公園の入り口に赤井の影が見えた。

「これはこれは、世界の本堂製菓会長の本堂矢白サマホンドウヤシロやないですか。」

よく見ればこの老人ひと、テレビでよく見る人だ。まさか妖師・アヤカシ・だったとは……。

「オマエ、主催者の……。何故じゃ！何故邪魔をした！？」

「そんな簡単や、こいつらはアタシの教え子やからね。それに、DBみたいに仲間が死んでから敵倒しても、何もならんて。」

赤井が初めて、教師らしいことを言った。女なのに、カッコイイとまで思える。秋永は呆然とその状況を眺めている。

「秋永、ぼつとせんと切裂と一緒に戦わんかい！アタシも混ざんでさっ！！」

「なっ、主催者がそんなことをして良いのか！？」

確かに、主催者がこの参加者同士の戦いに首を突っ込んでるのは、少々問題だと思う。赤井も覚悟を決めてのことなんだろうか。

「だって、主催者が何しようが勝手や。その時その時で、ルールを変えたり作ったりすりゃええねんやから。」

そんな理由！？だからアンタは割り込んできたの！？主催者だから何でもアリアリって何だこのゲーム！

「くそう、わしの願いである無限の富がああ。もういい、オマエらまとめて殺してやるうう！！」

やばい、本堂さんマジギレしてる。秋永も震えている、無論オレもだが、赤井は全くと言っていいほど動じていない。

「そんなことしたら、ルール違反でアンタ負けになるで。」

そうか！このゲームで殺していい人間は、過去に犯罪を犯した者や犯罪者のみだ。本堂はすぐに印を解く。

「ちいいつ、今日は退くしかない。」

本堂は公園から、ものすごいスピードで逃げ去っていった。

「ありがとうございます、赤井先生。」

「あつ、ありがとうございます。」

これで、今回は終わり……のはず。

「そやそや、今回は主催者に助けてもらったっちゅーわけで、アンタらは1週間ゲームに参加できましえん!!」

「「はああつ!?!」」

3巻 最強の妖師・アヤカシ・は会長サマ(後書き)

出場停止をくらった二人。どーすんの？

## 4巻　これはお決まり（前書き）

注意！今回は戦いなどは一切ございません。

#### 4巻 これはお決まり

「なあ、どーする？」

オレと秋永は悩んでいた。主催者の赤井に出場停止という、重い処分を告げられてしまったから。1週間というのは、短いようでもなく長い。秋永はダンマリだ……。そして、オレも別の意味でダンマリだ。クラスの男子が今にも、オレを呪い殺そうとする勢いだ……。

「あのさ、今度一緒に遊ばない？わたしの家で。」

「へっ!？」

「「うえええっ!？」」

オレも含む、男子全員がすんとんきような声をあげた。秋永さん、しよっぱなから何言ってるらっしやるのですか!?落ち着こうオレ、だが女子の家に行くのは初だ。心臓がクラッシュすんぞ!!

「うん、いいけど。」

明らかに動揺してる、してるよオレ。話題沸騰の華麗なる転校生の家へ、オジャマしちゃうのよ?オレは勝ち組よ!!無論のごとく、徹底的にボコられました。

「「粗相はねえよーにな。」」

同じこと言っな、オレだってそんなくらい解ってる。

そして、運命の日がやってきた。東国書店の前での待ち合わせだが、相当早く来過ぎた。当に2時間経っている。

「あっ、待った？」

左を見ると、私服の秋永がこっちに向かってくる。かわいい、やべえ鼻血が〜。

「べつにさ、今さっき来たから。」

オレは秋永の家に案内された。横にいてよくわかるが、いい香りだ。たまらん、たまらん、たつまらああああああん!!

「着いたよ、って癖毛ピンってなってる。」

「おお、悪いな。」

オレは必死に癖毛を元の位置へ戻そうとした、だが戻らない、微動だにしない。この毛が。そうこうしてるうちに、家に入ってしまった。

「こーゆう所での話って、男の子からするものだよな？」

オマエから話しかけてきたんだろ、と突っ込みたいが失礼だからやめよう。

「そんじゃ、秋永はなんで西中に来たわけ？あつこは天才奇人の集まりなのは、赤井から聞いてんだろ？」

「わたしは、基本的に漢字の力でスカウトされたの。」

秋永は5歳にして、漢字の1級をとったという。それはまあ、スカウトされるわ。5歳で漢検1級って、たしかに本物の天才だな。

「時男って、なんで西中に来たの？当然スカウトでしょ？」

今、呼び捨てで呼ばれた。これは、秋永なりの親近感を高めるための術すべなのかも。

「オレは全国少年空手大会3連覇した、その実力で西中に来たのさ。」

秋永は感心していた。どーしよ、呼び捨てで下の名前でこのままいつていいのかな？

「千鶴はどんな花が好きなんだ？」

「えっ、今呼び捨てで呼んだ？」

オマエも呼び捨てでだろーが。まさか自分の世界には人は入れませんタイプ！？

「べ、べつにいいけどー！」

これはツンデレですね、ハイ。オレの最も好みのタイプだ。

「うーん、マーガレットかな。」

オレはちよつとした手品（妖術）でマーガレットを出し、千鶴にプレゼントした。

「あつ、ありがと。」

ずっと話し込んでいた。すると、玄関のピンポンが鳴った。誰だ、

この時間をジャマする鬼は？

「おっ、姉ちゃん。」

「ひかり！」

千鶴の妹か、だがこの時間の終了のお知らせなんだと思う。

「じゃ、帰るわ。もう7時くらいだし。」

オレは初体験をした、これは死んでも忘れられない！さあ、あと6日どーしよっかな？

#### 4巻 これはお決まり（後書き）

恋路は順調なのかな？時男くん。  
ちなみに、作者はツンデレ好きです。

**5巻 闇夜の逃走劇(前書き)**

今夜もKIDDOが始まる・・・。

## 5巻 闇夜の逃走劇

もう1週間は経った、オレと秋永は参加してもいいはずだ。なのに、あの主催者は何の連絡もよこさない。まあ、アイツの事だから勝手に参加してくださいって感じだな。

「じゃ、ご勝手に参加しますか。」

しかし、オレたちは後々この行為がどれだけ愚かなことか身をもって体感する。すると、前方から一人の妖師 - アヤカシ - が現れた。

「おい、逃げろお！失格烏シカクロウに見つかったら、失格になんぞ！！」

「えええ！！」

わけわからん。オレと秋永はその言葉を信じてとりあず学校方面へ走った。でも、失格烏ってなんだ？

「なんだ、烏に見つかったら即失格なのか？」

「さあ？でも、もうゲームは始まっているのは確かだね。」

オレたちは、学校の体育館裏に着いた。ずいぶん走った気がする、足が結構きてる。

グアアアアアアツ！グアアアアツアアツ！

「な、なんだあ！？」

覗いてみると、3人の人間が烏の大群に襲われている。あつという間に3人はぐちゃぐちゃの死体になってしまった。

「秋永、あれがもしかして……。」

「失格烏に違いないわ。」

そこに背後から、赤井が現れた。てか、今までどこにいた？これはなんだ？

「アンタらには、まだ伝えてなかったな。今回は、あの失格烏に見つかったら失格つてことにしたから。ま、戦いやなくて逃走劇みたいなものや。」

「で、見つかったらあれですか？死ぬんすか……。」

「いや、見つかったても大人しくしてれば、あんな風にはならへんか

ら。」

そうか、安心した。つまり、さっきのは3人が見つかったとばれな  
いために、殺そうとしてたつてわけか。つーか、シツカクロウて・  
・。失格と烏クロウ混ぜただけじゃん。ネーミング超テキトーじゃねーか。  
「ついでに、失格烏は目が赤いから。こんな夜じゃわからんけど。」  
これは主催者のサービスと思えばいいのか？秋永も複雑な顔をして  
いる。とりあえず、アドバースと受け取るう。

「早く逃げや〜、そろそろ来るで。」

そういわれた瞬間、オレたちは学校を猛スピードで出て行った。学  
校を出た直後、あの鳴き声が聞こえた。また失格者がたわけだ。  
グアアアアアアツ！

「気味悪い、ホントに。」

秋永が最もだ、こんなキモイ烏はいねえ。黄昏とかの、雰囲気を出  
すにはピッタリだがこれほど気味悪いのはない。

「おい、君たち。何してるんだ？ここは立ち入り禁止だぞ。」

失格烏ではなく、警官に見つかった。しょーもねー。オレと秋永は  
別行動をとることにした。

「じゃ、オレはヨドバシんとこまでだな。」

オレはヨドバシカメラの方向へ、全速力で向かっていった。秋永は  
新宿駅前へ、向かっていった。どっちとも、夜も人が多い場所だ。

これなら、見つからないはず。だが、オレの予想はあっさり外れる。  
グアアアアアアアツ！！

失格烏の声が聞こえた、これはまた誰かが見つかったということだ。  
「この作戦も無意味ってわけかよ！」

恐らく、赤井が皆の心理を突いて烏たちを操っているんだろう。じ  
ゃあ、他にはどこがいい？多分ない。オレは秋永に電話する。前回、  
ケータイのメアドと番号を登録したのだ。きつちり関係は深めてお  
きました。

「そつちも失格者でたんだろ？」

「うん、10人以上。」

やっぱり、この逃走劇で安全な場所などない。

「あっ！見つかった！！」

「なに！？」

秋永、失格になっちまうのか？でも、抵抗すればさっきの3人のように・・・。

「水妖術！善浄霧<sup>ぜんじょうむ</sup>。」

！今、誰かの声。秋永じゃない、男の声だった。秋永を助けたのか？

「お仲間かい、ボクも共闘してあげるから駅前に来な！」  
オレはその声に、ただただ従って駅前に行った。

## 5巻 闇夜の逃走劇（後書き）

次回、秋永を助けた男の正体は！？目的はいかに！？

## 6巻 ジャニーツ組も参加してます（前書き）

前回、失格烏対策で別行動をとった二人だが、秋永が失格烏に見つか  
かった！その時助けた人物はいかに？

## 6巻 ジャニーズ組も参加してます

「あんたは何者だ？妖師・アヤカシ・なんだろうが。」  
「まあね、でもこつちも面倒なんだよ。守るより攻めるほうがいいでしょ。」

ホントにこの人物は何者だ。わかることは、敵意がない事と男つてことぐらいだ。でもこの声はどつかで聞いた事あるぞ。そして、目的地の駅前に着いた。タクシー乗り場付近に、秋永と電話の人物が立っている。その顔を見た瞬間、オレはハツとした。ジャニーズの新しいグループ、SHINの一人である加賀<sup>かがそつた</sup>奏太だったのだ。やっぱりイケメンだ、背も高えつ。

「ありがとうございます、加賀さん。でも、あなたもこのゲームに参加してるなんて。」

「ホントですよ、こんなバカより100倍強いし。」  
秋永はメロメロだ、それに乗じてオレを侮辱することは許さん！オレは浮かれてる秋永の顔に、空手3連覇者の拳を喰らわせた。

「うっへ！痛いじゃない！」  
「けっ、ピンピンしてるだろうが。」

そんなことをやってる場合じゃねえ、オレらは失格鳥から逃げなきゃならない。しかし抵抗したら殺されるハズなのに、なんで生きてるんだろう？

「あのお、なんで無事なんですか？抵抗したら死ぬって、赤井が言ってたのに。」

「ああ、あれは妖術で操られてるだけだから解いてあげただよ。」  
「すごい、そんなことができるのかと感心した。この人は、中身もイケメンだ！」

「っていうか、赤井って誰？」  
秋永が完全にアピールも踏まえて、かわい子ぶって答える。

「その人は、このゲームの主催者さんです。」ワタシたちの先生

でもあるんですけど。」

逆にいやなヤツになってるぞ、と心の中で突っ込んだ。

「それでどーする？失格烏は、影に隠れた人間も見つけ出せる。」

「そんな！どこも危険じゃないですか。」

オレは焦りを隠せない。つまり、建物の中に隠れても無意味ってことだ。

「一番いいのは、ボクみたいに解術かいじゆつが使えることだけだ。」

解術というのは、対妖術用につくられた呪術だ。妖術にかかったものたちを、元に戻す事ができる。ちなみに、これは秋永もできない。本物の天才でも、解術を得とくするのは難しいのだ。

グアアアアアアツ！！

しまった、オレらも失格烏に見つかった！！あ、でも解術が使える人がいるんだ。

「君たち！！アレを全速力で追いかけるぞおお！！」

加賀さんは、ウサイン・ボルト並の速さで失格烏を追いかけていった。なんで解術を使わない？

「解術はとも妖気を使うの！ほら、アンタも来なさい！！」

秋永のオレへの態度がとんでもなく変わった。これじゃ、なんの為の4巻なの？あの時間をもう一度！

「ようし！オレの新術見せてやる。水妖術、泡締華ほっていか！」

オレはこっそり新術を開発していた、秋永にバカにされないように。だがこれは、単体しか捕まえられない。早く解術を使ってくれ、加賀さん！

グアウウウ・・・

オレは何とか1羽の動きは止めたが、後は飛び去っていく。もう失格になるのか・・・。

「水妖術！善浄霧！！」

白い霧が、失格烏たちを覆う。そして、失格烏たちの頭から妖気が抜けてただの烏に戻った。加賀さんがやってくれた、オレと秋永はそう思った。加賀さんはしばらくして戻ってきた。

「君たち、ボク明日Mステあんだよ。やめっ・・・てよね。」

「すいません!!」

オレと秋永はお礼に、鳩サブレをプレゼントした。これで許してください・・・。

## 6巻 ジャニーツ組も参加してます（後書き）

急遽、ここでお知らせです。しばらく小説が書けません。そこで、この小説に出てくる妖術を募集したいと思います。種類は火・水・土・雷・風の5つです。感想に、こんな妖術がいいなというものを書いて下さい。ドシドシご応募願います！！あ、メールでもOKです。

## 7巻 新術開発（前書き）

書けないと言いながら、ちゃっかり書いた作者。でも、まだ募集は  
続けています。

## 7巻 新術開発

この世には、3つの妖術が存在する。1つはオレたち多くの妖師 - アヤカシ - が使う、凡妖術<sup>ほんようじゆつ</sup>。もう1つは、対妖術用につくられた解妖術<sup>かいようじゆつ</sup>、いわゆる解術だ。最後に、歴史が明治からという浅い妖術、機妖術<sup>きようじゆつ</sup>だ。最後のヤツは、科学と妖術を混ぜた変り種とっていい。オレは今、千鶴と一緒に妖術の鍛錬に励んでいる。オレは妖術を知らなすぎるといっわけ、山のような妖術に関する資料を読んでいた。暗い部屋のなか、黙々とオレは資料を読んでいる。

「目が痛え、休ませてくれ。」

「駄目、あと3時間がんばなさい。」

オマエはスパルタ先生か。後で度肝抜かせてやる・・・。千鶴は解術の鍛錬をしていた。自分には、才能があると言い聞かせながら。

オレはある1つの資料に、興味がわいた。

「 - 切裂実座理章典 - か、おもしろそうじゃん。」

これには、切裂家の歴史や妖術が書いてあった。オレは歴史より、妖術のほうを読み漁る。この際、禁術まで覚えちゃおっかな。

「えっと、水虎はつと。お、あるある。これはできて当然の妖術なり、うおい！」

オレは小さいころにあんなに苦労して覚えた術が、できて当然ということにシヨックをうけた。オレ涙目だよ。けっこう基本的な妖術についていろいろ記されている。オレにもできそうな術は多い。

「泡締華も基本のうちなのか、すげえなオレん家。」

「なに見てんの？へえ、時男の家の資料じゃない。」

後ろから、ひよいと資料を取り上げられた。オマエの私物なのに、なにがあるかくらい知つとけ。千鶴は、この妖術の練習を試みたらと言った。

「水妖術、水流銛<sup>すいりゅうせん</sup>。中級の攻撃技か、やってやる。」

少し読んでみると、妖気をかなり使いコントロールが難しいと書い

てある。危なっかしい術だな。まずは、水虎をつくってそこに妖気を圧縮させる。そして銚の形になったら放つ！

「おわあああっ！」

真上から水をかぶってしまった。これはムズイぞ、コントロールがしづらい。それに、失敗したら反動が半端ない。そう何度もできる術ではないと、改めて実感した。

この新術の鍛錬は、深夜1時まで続いた。今日は親がいなくて助かった、千鶴に泊めてもらおう。――

その数時間前、新宿に一人の妖師・アヤカシ・が現れた。その妖師・アヤカシ・は、あの本堂を殺して冥玉を手に入れていた。

「んだあ、あのジジイたいした事ねえべや。楽々、KIDDOに参加できるべ。」

妖師・アヤカシ・はある一人に復讐の闘志を燃やしていた。

「待ってるんだべ、切裂・・・時男！」

## 7巻 新術開発（後書き）

次回、時男は術を完成させられるのか！？そして、時男を恨むこの妖師 - アヤカシ - は何者なのか！？

8巻 六人切裂(前書き)

ひぢぢぢぢのマップです。

## 8巻 六人切裂

オレは中間テスト明けも、ひたすら新術鍛錬に励んでいた。千鶴は、勉強に集中していたみたいだが。

それでも、上位にこぎつけられるオレはスゲー。

「アンタって嫌な子やね〜。」

赤井にも、オレの成績のよさを言われた。しかし、なぜか知らんがモテない……。

「やれやれ、1匹狼のオレは一人さびしく、新術鍛錬ですよー。」

「そんなら、相手してやるべ〜。」

家の鍛錬場にいたオレの後ろに、人間が立っている。ここは比較的オープンな感じで、妖気も感じやすいところだ。なのにこの人間は、オレに全く気取らせずに後ろに回りこんだのだ。コイツはぜったいに妖師・アヤカシだ。

「んだああ、噂よりだいぶゆるいべなっ!」

いきなり攻撃、オレはとっさにかわす。その妖師・アヤカシの体を見たとき、オレは体が止まった。

「驚いたべ?この改造された肉体、オデの体に合わない大砲を。」

コイツ、体到大砲がくっついてやがる。しかも、とんでもない破壊力だ……。オレの後ろは、ただの荒地に成り果てていた。

「オデは、おめえに怨みがある者だ!」

「なに!?!」

どうゆうことだ、オレはコイツのことを知らない。今初めて会ったなのに、コイツはオレを知っている。それに、強い怨みをもっている。

「おめえの本家追放に、巻き込まれた人間だべさっ!おめえの本家追放のとき、オデの家族や多くの一族たちは皆反対した!でも最終的に、追放が決まってオデの家族なんかは全員死んだ……。オデは殺されはしなかったけど、体を機妖術の実験台にされたんだべ

！」

オレの本家追放のウラで、そんなことが……。だが、それは筋違いじゃねーか。殺すなら、本家の連中だろう。

「でもあいつら、オデを元通りにするって言ってきた。オデは六人切裂きりさきに入っておめえを殺す機会を窺ってたんだべ。」

「そうか、だがこつちも死ねないんだよ！」

こうして、互いの夢のために、二人の戦士は戦いを始めた。オレは本家に返り咲くために、オデやろうは体を元通りにするために。

「そーいや、名前聞いてなかったな！」

ドドドドドドオオオオオ！！

「これから死ぬヤツがそれを聞いてどーすんだべー？」

バチイイイ！！

オレの水虎がオデやろうに全部直撃した。なのに、ピンピンしている。くそつ、なんでだ！？

「対妖術装甲スプリットアーマー、妖術をすべて無効にする最強の鎧だべさ。」

「そんな、ありえない……。」

そうだ、妖術がすべて無効になるはずがない……。どこかは必ず、妖術が効く部分があるはずだ。

「土妖術！金剛烈弾ダイヤモンド！！」

ズドオオオオオオン！！

まずい、水妖術は土妖術に弱い。しかも、弾がデカすぎる！

「よければか、うおわっ！」

後ろのマンション、アパート等が廃墟と化している。これは警察だつて絶対来るわ。警察の世話になるのは御免だ。

「場所を移すぞ、警察が割り込んでくる！」

「あ、ああ。」

オデやろうは、少し動揺していた。実は、警察は動かない、いや動けないのだ。このKIDで起きた犯罪は参加中は全部チャラにできるというルールがある。それを利用したオレは、オデやろうに嘘をついたのだ。コイツがルールをよく知らないヤツで助かった。

「ここならバレないぞ。」

そして、再び戦いの火蓋がきられた。だが今回は圧倒的に不利というわけでない。ここは、じめじめした森だ。ここなら、水妖術の威力があがる。

「いくぞ！水虎！！」

「こりずにやるべか！」

予想通り、対妖術装甲を張ってきた。当然水虎は効かない、無効になる。だがそれが、連続でできるかな？オデヤろう。

「もう1発！いっけえ！！」

「金剛烈弾で掻き消してやるべ。」

ズドオオオオウ

「ん、爆発が小さい。」

オデヤろうは、思ったより爆発が小さいのに疑問を感じている。それは、水妖術は鎮圧を司る妖術だからだ。だから、爆発をだいぶ鎮圧させられたんだ。

「へえ、なっかなかおもしろいべ。でも、無能な妖師・アヤカシに負けるほど弱くないべさ！」

大砲の口をオレに向けてきた。すぐによけられるとわかっているのに……。

「土妖術！翔鉄槌！！」  
フライメタリック

尖った砲弾が放たれ、オレはそれをかわす。だが砲弾が追っかけてくる、追跡型の砲弾か！

「鉄には、鉄拳じゃああああ！！」

土妖術には、水虎は通じない。この空中では逃げる事もできない。だが、オレの拳でなら！無理でも、体中が砕けてもあの弾をぶっ壊す！！

バキイイイ！！

オレの骨が砕けた音が聞こえ、そして弾も失速して下に落ちた。オデヤろうが呆然としているスキに、あの大砲を今度は、跳び膝蹴りでぶっ壊す。

メキヤアアツ！

膝も砕けた、だが大砲も穴が開き使い物にならない。これなら、まだいける……。たぶん。

「こんなんで満足しちやいかんべ！」

大砲を捨て、普通の手がある人間になった。これは、義手が！そして、妖気もバカでかくなつた。

「お楽しみはこれからさ。」

8巻 六人切裂（後書き）

次回、オデやろうが本気を見せる！

9巻 四十神（前書き）

本気を見せるオデヤろう・・・。

## 9巻 四十神

大砲が外れた途端、オデヤろうの妖気が一気に上がった。つまり、さつきまでは前座ってわけだ。なめやがるぜ、六人切裂！恐らく、あの**大砲**はリミッターにもなっていたんだろう。

「ぐふううう、行くべよ！」

ボゴゴオオオオオツ！！

「なっ！？・・・」

オデヤろうの体がひとまわりデカくなった。大砲が外れた事で、溜まっていた妖気が体を強化させたのだ。

「待てよ、じゃあ対妖術装甲は外れたのか？」

オレは水虎を撃ち放つ、するとオデヤろうに直撃した。だが、もし予想が外れたらもう終わりだ。

「ぬおおおう、くそう！」

オデヤろうに初めて妖術が通じた。つまりあのチートじみた、鎧はもうないわけだ！これなら勝機はある！！

「ようし、究極奥義だべ！一族の切り札、アイアンメイデン重鉄変化！！」

オデヤろうはなにやら、呪文を唱え始める。するとオデヤろうの体が鉄のような色になり、そして重さがやばい程重くなった。その証拠に、オデヤろうの下の地面がへこんでいる。

「ふんがあっ！」

バゴオオオン！

地面を殴った衝撃で、オレは数十メートル先まで飛んだ。ホントに馬鹿力つてすげえ。

「ちいっ、腕足一本ずつ砕けてるからって・・・。」

オレはさつきオデヤろうを殴ったとき、大砲を壊したときに腕と足が砕けた。これじゃよけれわけがない。まだ妖気は、いくらでもあるがな。

「やってみますか、水流銛！！！」

鍛錬じゃ、1回ぼつきりしか決めてない。だが、最も威力が高い妖術だ。

「水妖術、水流銛!!!」

ズアアアアアアアアア!

妖気のコントロールに集中しろ、攻撃なんか構わん! いくつきゃねえぞ!!!

「おつ、デカい妖気だべ。」

オデやるう、危機感でも感じて引き下がったな。だが、水流銛はコントロール系の妖術だ。リーチだって伸ばせる、ハズ。

「殴ればいいべ。」

ドドオオオン!

「ウソだ・・・。」

オレの水流銛が、殴られただけで散った。やっぱ無理だったのか? オデやるうがこつちに突進してくる。死ぬわ、これ。

「ガンロッククタククル岩石激突!!!」

ストツ

鈍い音、多分内臓が逝った・・・。意識が遠のいてく、地獄いきかなるオレ。

「オイ、勝手二死又ナ。マダ、ボクトノ契約果タシテナイダロ?」

誰だ、この声。どつかで聞いた事ある、不思議と落ち着く声・・・。

「ホラ、アノ冥玉ト融合シタトキニ話シカケテキタサー。」

思い出した、あのときの声だ! でも、顔なんか知らない。話しかけてきただけだから。

「ボクノ名前ハ、シシユウシンカイレイ四十神海鈴。キミハ当主ニナリタイツテ願イヨモ

ツテ、コノKIDDOニ参加シタダロ?」

そうだ、海鈴の言うとおりだ。その願いのために、本家の証を犠牲にしたんだ。

「ボクハソノ願イニ協力スルノト代償ニ、キミノ妖気を、1日全力ノ25パーセント喰ラウコトニナッテル。」

「オレは知らないぞ、そんなの。」

まあいいじゃん、そう言われた。まあ、寿命をいただくとかじゃねーし。って、死ぬのかなオレ。

「アツ、キミ死ナナイカラ。元二戻ツタラボクノ名前ヲ呟クンダヨ！」

そして、さっきの森に戻った。すぐにオレは、海鈴と心の中で呟いた。その瞬間、オレの体が青白く輝いた。

「うおおおおっ！みなぎってきたああ！！」

「なんだべ！？何が起こったんだべ！？」

オデやるうは、腰を抜かしていた。この妖気の増え様に、オレも驚いていた。

「ちくしょう、岩石激突！！」

突進してきた、あれでオレは死に掛けたんだからな。だが、海鈴は酷なことを言う。

「ソノママ、ソノママ動クンジヤナイゾ。」

「はあっ！？」

ザパパアア

「うえあああ！」

なんだ、急にオデやるうが吹っ飛んだぞ。海鈴のやつ、なにをした？

「コレガボクノ力、衝撃反射サ！」  
ショウゲキハンシヤ

これすげえ！これあつたら無敵じゃねーか！オデやるうもフラフラだし。

「おんのれええい。・・・！？」

スババババアツ

オデやるうの体を光が貫いていた。瞬く間に、オデやるうは干からびてしまった。

「まったく、馬鹿な子。」

一人の青い眼をした女性がいた。今のセリフからして、味方じゃねえ。

「私は、奈津恵美。ナツエミ 六人切裂NO・3よ。今のは最弱のNO・6なの。」

「なっ！」

こんなことが・・・、あんなすげえ妖術が存在するのか？

「まあ、今回はコイツの始末だから。」

「ふざけんな！コイツはなあ、オマエらが元に戻してくれるっついでうから、オレと戦ってたんだぞ！」

奈津は、オレの言葉をまるで無視する。そして去っていった。

「ドウスル？」

「いつか倒す！だが、今じゃ勝てない。」

そうだ、人を道具のように扱う、あいつらのはびこる本家をはやく改善しねえと。

「じゃあ、ぼくらの仲間になりなよ。」

振り向くと人が集まっていた。

9 卷 四十神（後書き）

突如現れた、この集団は？

10巻 集団（前書き）

命を助けてもらった時男だが、この集団はいつたい！？

こいつらなんなんだ、いきなり後ろから出てきて。さっきの、奈津の仲間か!? いや、この声と姿。まさか、あの人か!

「加賀さん、ですか?」

「そうだよ。ああ、切裂くんじゃないか!」

やっぱり加賀さん、あんただったのか。でも、なんでいるの? しかも大勢の妖師・アヤカシと。やっぱり背、高。

「これって、どうゆうことですか?」

「この方たちは、ぼくの集団仲間さ。」

集団、それはこのKIDOにおいて大事なものである。この集団に入っている妖師・アヤカシは、失格してもリーダーがいる限り何度でも再戦できる、というものらしい。赤井のヤツ、説明ほとんどしなかったからな。

「わたしも、ここに入ってるの。」

「千鶴!」

なんと、千鶴もこの集団に入っていた。コイツは不純な理由で入ったな……。

「この集団名は、四十神だ。」

四十神、ということはこの大勢の妖師・アヤカシ・全員がオレみたいに、四十神と契約してるのか。

「わたしの四十神、出てきて! 星蘭<sup>せいらん</sup>!!」

千鶴が叫んだとたん、上から白い衣を纏った女性が現れた。これが、千鶴の四十神。なんか、美しい。でも、性格は……。いや、神なんだからそんなはずはない。

「アラ、千鶴ノ夫ニシテハ、随分ヤワソーナ。」

「おい、ふざけんな。誰がコイツの夫だ、しかも性格は同じって……。一応、神だろ?」

まあ、せつかく出してもらったんだ。オレも海鈴を呼ぶとしますか。

「出でよ、海鈴！」

「ヤア、ボクハ海鈴デスウ。」

ついでに言うと、海鈴は1つ目の鮫のような姿をしている。そして、オレの予想通りの展開になった。

「グオブ、ボグ魚ノ神ダカラ息ガアア！」

オレはすぐに、海鈴を引つ込めた。なんだこのポケポケな神は。どこ探してもいねえぞ。そして皆、自分と契約した四十神を出した。やっぱり、すぐにダウンするものも出た。水棲生物系の神がほとんどだった。やっぱバカだ……。

「こんなにも、神がいるとは……。しかし、多すぎて崇高さを感じられないな。」

そうだ、天界とかにいる神がこんなにいると偉大さが欠ける。加賀さんの四十神は、蛸だった。

「そうそう、リーダーに挨拶しといたら？」

振り向くと、顔が半分爛れている男が現れた。皆、頭を下げている。このコワモテがリーダーというわけだ。

「このガキも、四十神なんだな？」

「はい、そうですリーダー。」

あの加賀さんが、解術も心得ている加賀さんが頭を下げている。この男、とんでもねえ妖師・アヤカシだ。妖気が現れた瞬間から、半端ない！

「オレ、切裂時男と申します！」

あつ、言葉がおかしくなつてた……。でも、この男は何も言わなかった。案外器がデカいのかも。

「おい、オレの練習相手しろ。」  
ビリリリリイイイ

「がああああああつ！」

全身に電流が走った。しかも、今までよりずっと重い！あの男、いきなり攻撃してきやがった。

「いいか、この世界人様に従えない家畜は、滅びるのが常なんだよ

！」

さらに攻撃を続けてくる、前に体を回復したので、動ける。これは恐らく四十神の攻撃だ、男が一步も動いていない。

「逃がさねえ！」

一瞬だったが、猪のような影が見えた。男の四十神だろう。でも、このままだと殺されるぞ絶対。

「コノ先ニ池ガアル！ソコニ潜レ！」

「わかった。」

走っていくと、小さな池が見えた。オレはがむしゃらに、池に飛び込む。

「水流銛ヲ唱エ口。」

海鈴の言われるがまま唱えると、渦がオレを包み飛び出した。でも、まったく息苦しくない。

「ソノママ妖気ヲコントロールシロ！」

「じゃあ突つ込むぞ！」

オレは目の前の、光に突つ込んでいく。その光にぶつかり、周りに衝撃が起こる。

「きゃあああつ。」

「ぐつ、リーダーと互角なんて。」

衝撃が治まった後、オレは横に倒れていた。男がこっちに近づいてくる、少しは実力がわかったかよ？

「てめえ、見所あんじゃねーか。オレは高田光コウダヒカルだ、よろしくな・・切裂。」

こうしてオレは、実力を認められ集団四十神に入った。

10巻 集団（後書き）

次号、学校内に妖師 - アヤカシ - が . . .

11巻 蟲の悪戯(前書き)

一夜明けたら、テストが待っていた・・・。

## 11巻 蟲の悪戯

人という生物は、さまざま種類がある。たとえば、名前が良よなものに真逆の最悪の不良だったり、やせている割に大食いだったり、本当に千差万別と言っている。オレの学校にも、そんな生徒がけつこういる。オレも、姓が物騒だがまともだったりする。千鶴だって、姓に秋があるのに春が好きらしいし。

「うわあああん、テスト最低だよおお。」

コイツは田丸タマルサイ才、名前はいかにも秀才なんだが実際は学年最下位クラスのドアホだ。そのうえ、運動能力も低い。でも、ここに入れたのはなんらかの理由があるんだろうな。

「なあ時男、この後屋上来いよ。テスト終わったんだし。」

「いいよ、久々にオレらで語り明かすか。」

そのとき、才の顔が笑ったがオレはテストからの開放感かと思った。その後、オレたちは屋上でずっと話しこんでいた。もう夜になるが、オレにはほんの数分しか経っていないように感じる。

「そろそろ時間だな。」

「ああ、じゃ帰るわ。」

パシィィッ！

才がオレの腕を強く握った。この痛さ、ただの寂しいだろとかそういうのじゃないな。

「帰すもんか、妖師 - アヤカシ - 。切裂時男おお。」

「なに言ってる・・・んだ？」

才、マジでどーした！なんで妖師 - アヤカシ - なんて単語が出てくるんだよ！

「離せ、このポケが！」

オレは才を蹴り飛ばす。すると、一瞬にしてちぎれてしまった。

「時男くん、人を殺したんだ。」

後ろには、女子がいた。その女子の後ろには、多くの人間がいた。

これあなんかの嫌がらせか・・・？

「人殺し、人殺し、人殺し、人殺し、人殺し。」

「なんなんだ！？これ、ただの人形だろ！？」

だが、あれは才だ。ちぎれる時、血が吹き出て飛び散った。完全に殺したことになる・・・。

「さあ、才のように私たちも殺ってみせなさいよ。」

「ふざけんな！！」

ブシャーアアツ

女子の顔を殴ったら、血を飛び散らせながら倒れた。これは、悪夢だ！ほかのクラスメイトや先輩たちまで集まってくる。オレはこのウジ虫たちを振り切った。

「うつつ、殺しちゃったよ・・・。2人も・・・！」

オレの目の前を、1匹の蚊が飛んでいく。あまりにもものうのうと飛んでいるから、潰した。すると、視界がグルグルとなって屋上に戻った。

「なんだ！？」

わけがわからない。蚊を潰した瞬間、なにかが途切れたかのような感覚を覚えていたからだ。これは恐らく、どこぞの妖師・アヤカシ・だな。

「ちえつ、終わったよ。」

オレの目の前に才が立っていた。アイツが仕組んだニオイポンプンだなおい。オモKIDOの参加者ってわけか。

「ぼくの奇怪蟲きかいむしがこんなボロボロに・・・。」

才が死んだ蚊を、手のひらに乗せて嘆いていた。あの蚊がオレにどんな幻を見せてたらしい。

「蟲はぼくの細胞の一部だ、それを殺されることは自分の体を一部潰される痛さと同じ、いや超える痛さなんだよおお！」

「イ○セ○タ○は○かよ、どこのカードゲームだよ・・・。」

「黙れ！妖術、万蚊渦ばんかうず！！」

大量の蚊が、オレに襲い掛かってきた。全部日本脳炎もってる、あ

の赤い蚊だった。

「衝撃反射！！」

オレ、いや海鈴がつくった水の壁に蚊は全部ぶつかり、気絶した。蚊はもう役立たずだ。

「おのれえ、調子にのるなあああ！」

ハツと掛け声をかけた途端、巨大な蛾が現れた。

「見たかあ！？これが、妖魔奇錬なりい。」

妖魔を召喚したオレは、その妖魔に乗り、攻撃を始めた。よけようにも、なぜか体が1歩も動かない。

「ヒヨヒヨヒヨ！麻痺の粉に触れたな？奇錬は羽ばたくとき、さまざまな毒を撒き散らすのさ。」

オレはガスマスクを装着しながら、勝ち誇ったように話す。

「へっ、体が動かなくても術あ使えるぞ！」

オレは水流鉢を唱え、粉を消し飛ばした。オレは、驚いた。オレの予想以上の、妖気と根気に。そして水流鉢が、巨大蛾の腹を貫いた。

「いやあああつ、最高の蟲なのにい！」

オレは、屋上から地面に叩き付けられそうになったが、オレが受け止めた。

「あつ、先ほどは申しわ」

「死ねダアホ！」

バキイイイ

11巻 蟲の悪戯(後書き)

このKIDDOも、前半戦が終了しつつある！

12巻 邪拳（前書き）

新年明けましておめでとございませう！  
もうそろそろ入試の作者です。

## 12巻 邪拳

ここは時男の実家、実座理寺。妖術の総本山であり、日本最大級の寺院である。その大本堂に時男を追い出した張本人、時男の父である唯我ユイガがいた。

「さて、NO・6が死んだわけだが・・・次は誰が行く？」

「ヒヒツ、当主さまあ。ヴォレッツチがサクツと、消してやるぜい。でも、たった一人の息子だろあ？いいのかい？」

「構わん、今となつては赤の他人だ。行け！NO・4コクシムソウ国土無双。」

NO・4は時男のいる新宿へ飛んだ。

時が経つのが早い、オレは景色を見てそう思った。入学したのがこの間のように思える。今はもう冬だ、まだ雪はチラついてすらいない。ぼたん雪より、粉雪のほうが積もるらしい。冬は嫌いだ。雪が、まるで人の魂のように見えてくるから。しばらく歩くと、空から雪が降ってきた。母さんが死んだあの日も、こんなぼたん雪だったな。「しっかし、なんなんだ？集団四十神のメンバーは、料亭綾瀬に集合つて。」

千鶴からケータイで連絡があつた。なんで知ってるかは、4巻でいろいろやったからであり、それ以上でもそれ以下でもない。オレは料亭綾瀬に入った。席には、四十神のメンバーが揃っていた。

「おう、リーダーから武器の配布だぞ。」

「武器？この刃物が。」

オレはメンバーの一人、桑田竜クラタリユウから刃の短い刃物を渡された。これ下手すると、果物ナイフのほうが強いぞ？すると、リーダーの高田が刃物の使い方を説明した。

「いいか、これは妖気を吸収できる蛇印鉄ジャコウテツつーやつで、刃ができています。持つトコは、普通より硬めの木材だな。」

高田は、刃物に妖気を込めた。すると刃が光り、何倍もの長さに伸びた。これは、妖気の込め具合で刃の大きさが変わるらしい。調子

にのつて高田が妖気を込めすぎたせいで、刃が伸びすぎて天井を突き破ってしまった。

「お客様、修理代26万8千円支払っていただきます！」

「申し訳ありません・・・。」

高田のことだから、マケるとか言うかと思いきやあつさり支払った。その後2、3時間大人たちは飲みだくれ、オレたち子供は食いだくった。

「さて、帰ろうか。」

皆が外へ出たとき、一人の男が立っていた。その姿を見た瞬間、オレは背筋に寒気がした。

「久しいなあ、元次期当主さまあ。ヴォレの顔は忘れてくても忘れられないだろあ？」

「国土無双、六人切裂のメンバーだったのか！」

コイツは忘れねえ、母さんを目の前で殺した人間だからな！殺り返すなら、今しかない！

「前のヤツの仲間なら、手加減しなくていいね！」

桑田が前に出て、四十神を呼び出した。それは、頭が3個ある蛇のような姿をしていた。

「最近ノ若者ノファッションシテルゾ。」

3個の頭が国土を同時に襲う、これはよけられない。  
ドスッ！

「ゲハッ、コノ若造何ヲシタ・・・？」

「どうした、蓮対！」

桑田の四十神が、いつの間に？国土は何もしていないハズだ！オレは国土に我を忘れて、突っ込む。国土が構えた途端、オレは動けなくなった。自分の腹を見ると、国土の突きが刺さっていた。

「その独特の構えは・・・、邪拳か・・・。」

オレは目の前が真っ暗になり、うつ伏せに倒れる。

「時男！時男！」

「ヴォレッヂの邪拳をまともに受けたんだぜえ？元次期当主さまは

召されたさあ！」

国士は高らかに笑って消えてしまった。千鶴を含む、四十神のメンバー全員が悔しさと虚しさを顔に表していた。

12巻 邪拳（後書き）

さてさて、いつ次の話を出しましょう？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5096i/>

---

妖師-アヤカシ-

2010年10月9日03時09分発行